

氏名	寶 兆銳
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5184 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部科学省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	山鹿素行における聖学についての研究 —朱子学と韓非子思想の受容と変容をめぐって—
学位論文審査委員	主査・教授 姜 克実 教授 遊佐 徹 准教授 本村 昌文 教授 出村 和彦

学位論文内容の要旨

本論文の構成および各章のもとになった研究発表・学術論文は、以下の通りである。

- 序 章 研究史の回顧と問題設定
- 第一章 朱子学における「原理論」と「修養論」の受容と変容をめぐって—朱子学中心時代をめぐって—
- 第二章 朱子学における仏教批判の受容と変容
- 第三章 山鹿素行における異端対策の成立
- 第四章 山鹿素行における「日本中朝主義」とその形成
- 第五章 山鹿素行における法治思想の形成—『韓非子』の受容を手掛かりにして
- 終 章 まとめと展望

上記の章のうち、第一章は『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 36 号(2013 年 11 月)、第二章は『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 38 号(2014 年 11 月)、第三章は日本思想史学会 2013 年度大会(2013 年 10 月、於東北大学)で研究発表を行い、『東北師大学報(哲学社会科学版)』2015 年第 2 期に投稿し掲載が確定したものをもとに構成されている。

本論文の要旨は、以下の通りである。

本論文は 17 世紀日本において儒学者および兵学者として活躍した山鹿素行(元和 8 年・1622～貞享 2 年・1685)の思想形成を中国思想、とくに朱子学と『韓非子』の思想の受容と変容に焦点をあてて検討したものである。論文は序章と終章をあわせて全七章・128 頁(1 頁・40 字×30 行)である。

序章ではこれまでの山鹿素行研究の歴史を回顧し、従来の研究を①山鹿素行が朱子学批判を通して形成した独自の思想について、その形成過程や概念および個別の論点(武士道論や歴史観など)の解明を主とするもの、②近世日本の社会状況や支配思想をふまえて、素行の思想内容とその位置づけを解明することを主とするものという二つの類型に整理する。その上で、いずれのタイプの研究においても、素行の思想形成に多大な影響を与えた中国思想、とくに朱子学と『韓非子』の思想との比較検討が十分になされていないことを指摘する。なお、素行の思想と朱子学の比較検討はこれまでの研究においてもなされてき

たが、本論文では朱子学をその大成者である朱熹（1120～1200）の思想のみならず、中国明代に展開したさまざまな朱子学の思想をも射程にいった検討の必要を提唱する。以上の研究史の整理をふまえ、本論文は素行の独自の思想が形成される過程において中国思想がいかに理解され、重要な役割を果たしたかということをも中国の宋代～明代における思想的展開をふまえて考察をするというスケールの大きな問題を設定している。

第一章では、若き素行が朱子学を信奉していた時代に焦点をあて、当該時期における朱子学理解の特質を検討している。ここでは、従来の研究では朱子学の形而上的な側面を批判することを通して形成され、素行の思想の特色といわれる形而下的な日常生活に根ざした実用的な思惟が実は朱子学を信奉していた時期の朱子学理解にあらわれていることを明らかにしている。

第二章では、素行の仏教批判の検討を通して朱子学理解の内実を検討している。ここでは、朱子学においては仏教批判が形而上・形而下の二つの側面から批判されるのに対し、素行は朱子学の形而下的な側面からの批判（人倫日用の観点からの批判）のみを受容したことを明らかにしている。さらに、素行の思想形成の過程を跡づけることを通して、素行が朱子学のもつ形而上的な仏教批判が実は朱子学そのものを仏教化させているとの認識をもつにいたり、朱子学自体を仏教と同一視して批判していくと指摘している。

第三章では、仏教批判からさらに視点を広げ、異端批判と異端対策について、中国明代の朱子学をも視野に入れて検討をしている。従来の研究では、素行の異端批判および異端対策は、朱子学とは異なる兵学の立場からなされているということを通説であった。それに対して、本論文では、素行の異端批判・異端対策は、朱子学を信奉していた時代に重要視していた中国明代の朱子学者である丘瓊山（1420年～1495年）の『大学衍義補』からの影響により形成されたことを明らかにしている。

第四章では、前章までの主に朱子学を信奉していた時代における考察をもとに、素行が独自の思想を打ち出す時期に焦点をあて、とくに「日本」を「中華」と捉える「日本中朝主義」における中国思想の影響について検討している。従来の研究は、素行の「日本中朝主義」は、①皇統の一系性、地理（水土）と軍事（武威）の優越性にもとづいて形成された、②中国の礼や教を保持するか否かという流動的な文明観によって決定される、③①と②の関係の仕方を明らかにするという三つの立場からなされてきた。これに対して、本論文では②で示された「礼教」について、素行は中国で説かれてきた流動的な文明観ではなく、中華から夷狄へと一方通行的に転換するという独特の礼教観を形成していること、その上で素行は皇統の一系性、地理（水土）と軍事（武威）の優越性よりも彼独自の「礼教」により「日本中朝主義」を形成していたことを明らかにしている。

第五章では、第四章で検討した礼の問題をさらに敷衍させ、素行が晩年に重視する「法」についての考え方を検討している。ここでは、これまでの研究で見過ごされてきた素行の「法」に対する認識には中国の法家思想の代表的著作である『韓非子』の受容によって形成されたことを明らかにしている。

終章では、本論文のまとめを行い、さらに本論文で明らかになった素行の思想形成における中国思想の影響、とくに中国明代における思想との関わりから近世日本における思想史研究の展望について述べている。

学位論文審査結果の要旨

竇兆鋭「山鹿素行における聖学についての研究－朱子学と韓非子思想の受容と変容をめぐって」に関する学位論文審査は、2015年2月20日（金）15:00～17:00、セミナー室2-9で行われた。学位論文審査委員として、主査である姜克實（日本史）、ほかに遊佐徹（中国文学）、出村和彦（倫理学）、本村昌文（日本思想史）の計4名が参加した。

まず論文提出者より論文の概要について、研究成果を中心に述べてもらい、各審査委員からの質疑応答がなされた。

本論文の成果をまとめると、以下の4点になる。

- 1、これまでの研究で十分に明らかにされてこなかった山鹿素行の思想形成における中国思想の果たした役割、とくに中国明代の朱子学者である丘瓊山と法家の『韓非子』の思想との比較検討がなされ、素行の思想に与えた影響を丹念に描き出していること。
- 2、これまでの研究においてほとんど注目されてこなかった若き素行の朱子学信奉時代において、すでにその朱子学理解において後年の素行独自の思想といわれる思惟方法の萌芽がみられることを明らかにしたこと。
- 3、朱子学への批判を通じて形成された素行独自の思想といわれる「日本中朝主義」においても、中国思想からの影響（礼による統治）が色濃く見られることを明らかにしたこと。
- 4、1～3の成果を通して、近世日本、とりわけ17世紀日本における中国明代の思想からの影響の大きさを指摘し、今後の近世日本思想史研究における重要な視座を切り開いたこと。

上記のほか、審査委員からは決して理解しやすいとはいえない素行の著作を丹念に読み解き、中国思想との比較検討を通して考察し、素行の思想の論理構造を整理・叙述した点が高く評価された。

以上の高い評価の反面、審査委員より、①素行の思想の論理構造の分析に留まり、当時の社会の中で位置づけるまでには至っていないこと、②①と関連してこれまでの研究で注目されてきた素行の思想における武士論や兵学の側面を捨象して論を進めていること、③素行の読んだ中国関係の資料の全体との比較検討にまでは至っていないこと、などの課題も指摘された。これらの課題は残すものの、本論文は独自の視点と丹念な史料解釈に基づき、多くの新知見を提示している。さらに、こうした課題については、論文提出者がすでに確かな研究の構想を有しており、今後の研究の進展により近い将来解決されるであろうことが質疑応答を通して確認された。本論文が斯学の発展に寄与するところが大きいことは、審査委員の一致した意見である。

以上より、本論文の提出者は博士の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。